視覚障害者への点字情報端末訓練
－点字に熟達していない者への指導を中心に－

七沢自立支援ホーム　　矢部健三

１．はじめに

七沢自立支援ホーム（以下「当施設」）では、2006年度からコミュニケーション訓練の一環として点字情報端末の紹介・訓練を行ってきた。本稿では、2017年度から2018年度に当施設で訓練を実施した3事例について訓練内容と結果を報告する。

２．使用機器

図1と表1に、訓練で使用した点字情報端末の仕様を示す。

図1　ブレイルセンスオンハンドU2ミニ

表1　ブレイルセンスオンハンドU2ミニの仕様

OS	Windows CE 6.0
外形	横172mm　奥行90mm、高さ27mm、重さ427g
キーボード	6点パーキンス（点字タイプライター）スタイル
点字ディスプレイ	18セル
内蔵メモリ	32GB
ネットワーク	無線LAN　802.11B/G/N対応
インターフェイス	USB TypeA、SDスロット、イヤホン端子、マイク端子
バッテリー	着脱式リチウムイオン充電電池 （3時間の充電で9時間の連続使用が可能）
機能	日本語テキスト文書の作成、点字文書の作成、ウェブアクセス、電子メールの送受信、DAISY図書や音楽の再生など

３．事例

表2に訓練を実施した事例のプロフィールを示した。

表2　点字情報端末訓練実施事例のプロフィール

	事例1	事例2	事例3
年齢／性別	50代女性	50代女性	20代男性
障害原因	網膜色素変性症	網膜色素変性症	多発性硬化症 （視神経脊髄炎）
障害等級／視力	1級、両眼0.01	2級、両眼0.01	1級、右0.02 左0.03
他の障害	－	－	四肢体幹機能障害
利用期間	18年4月～8月	18年6月～12月	17年6月～18年3月

事例1は、点字・PC・スマホは既習。点字は1年半で55回地域の点訳ボランティアから読みを中心に指導を受けている。読速度は6.17cpm。

事例2は、点字・PC・スマホは既習。点字は情報提供施設で数回紹介を受けた程度でほとんど読めない。触知覚テスト33点。

事例3は、点字・PC既習。点字は特別支援学校在籍時に3年間書き中心に指導を受けたが、触読はほとんどできない。触知覚テスト36点。

４．訓練経過

表3-1から表3-3に各事例の訓練経過を示した。

表3-1　事例1の訓練経過

項目	回数	内容・結果
点字読み	39	国際サイズ点字での短編読み 読速度18.29cpmに向上
点字情報端末	19	ワードプロセッサ：文章の聞き書きと校正 入力速度50音1回1分57秒 ファイル管理：読み込み、ファイル名の変更、コピー・削除

表3-2　事例2の訓練経過

項目	回数	内容・結果
点字読み	53	国際サイズ点字での単語・短文・短編読み 読速度13.50cpmに到達
点字情報端末	16	ワードプロセッサ：反復入力練習、文章の聞き書きと校正 入力速度50音1回7分7秒→2分15秒 童謡「うさぎとかめ」9分21秒→2分26秒 ファイル管理：読み込み、ファイル名の変更、削除

表3-3　事例3の訓練経過

項目	回数	内容・結果
点字読み	61	国際サイズ点字で単語・短文読み 読速度10.74cpmに到達
点字情報端末	3	ワードプロセッサ：反復入力練習 入力速度50音1回2分39秒→2分29秒

５．考察

今回報告した事例は3名とも点字触読に熟達した者ではなかった。そのため、点字情報端末導入前訓練として点字触読訓練が必要であった。しかし、いずれの事例も当施設で中途視覚障害者の点字学習目標としている読速度33cpmには到達できなかった。

事例1と事例2では、ブレイルセンスU2ミニの「基本文書」の設定が「テキスト」の場合、文章校正の場面でカーソル表示やスペース表示の理解に混乱がみられた。「基本文書」を「点字」に設定変更することで、いずれの事例も操作ミスが減少した。導入時には「点字」に設定し、点字ディスプレイの触察や機器の操作に慣れた段階で必要に応じて「テキスト」へ変更する方が望ましいと思われる。

事例2と事例3では、文字入力のスピードビルディングとして童謡を歌いながらその歌詞を入力する反復入力訓練を実施した。事例2では入力速度に大幅な向上がみられたが、事例3では四肢体幹機能障害の影響からか若干の伸びにとどまった。視覚単一障害の者にはスピードビルディングとしてこの方法は有効と思われる。

６．おわりに

近年、盲ろう者だけでなく視覚単一障害の者にも点字情報端末を給付する自治体が増えたこともあって、点字に十分熟達していない者が点字学習の補助具も兼ねて点字情報端末を申請するケースが増えている印象を受ける。機器選定時には、インターネット閲覧や電子メール、サピエ図書館利用など多機能なブレイルセンスシリーズが好まれる傾向があるが、点字に熟達していない者がこれらの機能を使いこなすことはかなり難しい。訓練開始時には利用者とよく話し合い、機能を絞ってニーズに即した訓練や端末の設定を行うことが重要であろう。